

年間第四主日

2012.1.29

マルコ 1・21-28

今年の年間主日を通して、私たちはマルコ福音書に記されている主イエス・キリストの足跡をたどり、新たな心でその御後に従うよう招かれています。

先週の日曜日、私たちはマルコ福音書によって伝えられた主イエスの最初のみことばを聴きました。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」このみことばをもってマルコ福音書の中に登場する私たちの主イエス・キリストは、あの最初の時と同じように、このみことばをもって、ここに集う私たち一人ひとりに訪れてくださるのです。ミサとはそのようなものです。このミサの中で、福音書の主のみことばを聴く時、私たちはその主イエスのみことばを、今日新たに、私たちに向けて語られる主のみことばとして聴くのです。

ミサの度ごとに、私たちはご聖体を拝領します。私たちが拝領するそのご聖体のパンは、私たちの主イエス・キリストが、あの最後の晩餐のときに、弟子たちに裂き与えてくださったパンです。そしてそれは、十字架の上で私たちのために与え尽くしてくださった、いのちそのものとしての主の御体なのです。「取って食べなさい。これは、あなたがたのために渡される、わたしの体である。」あの最後の晩餐のときに、このように言われた私たちの主イエス・キリストは、今このミサの中で、あの時と全く同じように、そのいのちのすべてをご聖体のパンにこめて、このミサに集う私たちに分ち与えてくださるのです。これは、私たちのカトリック教会に伝えられてきた「信仰の神秘」です。私たちはこの信仰の神秘に招き入れられた者たちとして、このミサの中で、信仰の神秘そのものである主の聖体を拝領し、主イエス・キリストのいのちをこの身にいただくのです。ミサは、カトリック信者としての私たちの信仰のいのちを支える、カトリック教会に受け継がれてきた「信仰の神秘」の祭儀なのです。そのミサの中で、「取って食べなさい。これは、あなたがたのために渡される、わたしのからだである。」と私たちの主イエス・キリストは、ご聖体の神秘の中から、ここに集う私たちをそのいのちに招いていてくださるのです。同じように、ミサの中に響く福音書に記された主イエス・キリストのみことばは、このミサに集う私たち一人ひとりに向けて語りかけておられる主のみことば、主の御声なのです。

私たちのカトリック教会に受け継がれてきた信仰の神秘の伝承に基づいて、ミサをこのように受け止めるなら、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて

福音を信心なさい。」という福音書のみことばは、今このミサに集う私たちへの主イエス・キリストの呼びかけとなるのです。ミサに集う私たちのもとに、このみことばをもって主イエスご自身が近づいてくださり、そのことによって、私たちのためにその御子をこの世界にお遣わしになった神がお望みになられた神の国が、主イエス・キリストを迎えた私たちの中に実現されて行くのです。

「悔い改めて福音を信じなさい。」との呼びかけは、ミサにおいて示されている、このような信仰の神秘への招きです。私たちの想いを越えて、この信仰の神秘の前に膝をかがめる時、私たちのために神が用意されておられた時が、私たちにも訪れるのです。主イエス・キリストに従って生きる、私たちの救いの時が訪れるのです。

「わたしに従いなさい。」と主に呼びかけられたとき、ガリラヤ湖の漁師であった最初の弟子たちは全てをその場に残して、主の後に従ったと先週の福音の中で私たちは聴きました。「悔い改めて福音を信じなさい。」という呼びかけに応えるということはそのようなことです。私たちはカトリック教会の信仰の神秘の伝承の中で、私たちを招いておられる主が、どこにいてくださるかを知りました。そこから私たちを招いておられる主の呼び声に従うために、こうして、この寒さの中、私たちは日曜日の貴重な時間を犠牲にしてこのミサに駆けつけたのです。

私たちをここに呼び集めてくださった主は、弟子たちを神の国へと招くために進み行かれた道へと、私たちを招こうとしておられるのです。福音書に記されたイエスが歩み行かれた道に従うことが、私たちの信仰の道なのです。そして、主イエスに従って歩むその道において、私たちは主イエス・キリストが私たちに開いて見せてくださる神の国に招き入れられるのです。ここに呼び集められた私たちはそのような道を歩む者たちとして、このミサに集っているのです。

今日の福音は、安息日の会堂で教えを宣べる主イエスのもとへと私たちを招いています。そしてその主イエス・キリストはあの会堂に立たれた主として、今日のミサの中で、私たちに語りかけてくださるのです。イエスの教えを聴いた人々は、その教えの中に響く権威に圧倒され、驚いたと語られています。イエスのみことばには、神から遣わされた者としての権威が現れていたからです。

あの会堂でイエスのみことばに耳を傾けた人々のように、私たちは福音書を通して語りかける主イエスのみことばを、私たちに語りかける神のみことばとして聴くのです。神のみことばは、天地創造の始めからそうであったように、神が望まれることを私たちの中に実現して行きます。「光あれ」というあの最初のみことばによって、この世界に光がもたらされたように、私たちの中に主イ

イエス・キリストによって神がもたらそうとしておられる信仰の光が灯されて行くのです。「悔い改めて福音を信じなさい」との主の呼びかけは、その光に向かって私たちを招く主イエスの招きのみことばなのです。

あの安息日の会堂に汚れた霊に取り憑かれた人がいたと今日の福音は語り続けます。あの会堂に汚れた霊に取り憑かれた人がいたことは決して偶然のことではありません。主のみことばを聴く時、私たちの中の汚れた霊、この世に生きる私たちの中に潜んで、私たちを束縛している汚れた霊の正体が露わにされるのです。

「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。お前の正体は分かっている。神の聖者だ。」とあの人の中で汚れた霊は叫んだと語られています。私たちのうちに潜み、私たちを束縛している汚れた霊も、このように叫ぶのです。イエスがどのようなお方であるかを知っていながら、私たちのうちに潜む汚れた霊は、決して、そのイエスのみ後に従ってついて行こうとはしません。むしろ、「かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか」と叫びたてるのです。そのような汚れた霊に取り憑かれていることを、私たちは自分自身のうちに感じています。主イエスのみことばを聴く時、その場では分かっているつもりでも、その主のみことばに従っているとはいえない私たちがいるからです。

「黙れ。この人から出て行け」あの安息日の会堂で、このように汚れた霊にお命じになった、主イエスがこのミサの場においても、私たちのうちに潜む汚れた霊を追い払ってくださるようお願いしましょう。汚れた霊は、あの人を痙攣させ、大声を上げて出て行ったと語られています。そのことが、私たちにとって、どんなに苦しいことであっても、心の底からイエスを信じ、そのみ後につき従う信仰の道へと歩み出すことができるために、私たちの内なる汚れた霊から清めていただくことを願って、主イエス・キリストの御前に膝をかがめたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高